昭和54年８月１日（第３種郵便物承認）令和５年11月28日発行（毎週火曜日）　ＡＪＵ増刊通巻第 15027 号

私たちは、自閉症という障害をもつ人たちが、彼らなりに社会の一員として自主自立をめざし、豊かな人生を生き抜くよう共に道を拓いていくことを目的としています。

ＡＪＵ 檜の里

令和５年11月28日 発行 ／ 第111号

発行人 ＡＪＵ
東海身体障害者団体定期刊行物協会
名古屋市中区丸之内３－６－43 みこころセンター4F

編　集 社会福祉法人 檜の里
〒510-1326　三重県三重郡菰野町杉谷 1573
電話（059）394 － 1595
編集責任者　山田　勉
購読料　１部 100 円
（会員の購読料は会費に含まれています）
URL　http://asakegakuen.com

あさけ学園のオリジナル商品

食品加工　地産材料のみそ、梅干し

木工　間伐材の焼杉製品

パン工房〈輝〉として道の駅で販売

紡ぐ・繋がることの大切さ

ワークセンターひのき　管理者　**中 村 和 博**

あさけ学園に入職して、三十年が経とうとしています。自閉症という言葉は知っていましたが、雇ってもらうことが決まって、レインマンを観た程度の浅識でした。自閉症の「自」の字も知らなかった私がここまで出来たのは何故か？

最初は当時のD棟に配属されました。重度・最重度と言われる人が大半で、行動障害も多かった住人さん（当時は利用者さんのことをこう呼んでいました）ですが、個人差はありますが身の回りのことはある程度できる人達でした。

印象に残っていることの一つとして、洗濯物たたみでの出来事があります。洗濯物を夕方各自でたたむのですが、一般的には上着やズボンを形としては四角くたたんでいくものだと思っていたのですが、一部の住人さんは四角ではなく、クルクルロール状に巻いて行きます。

それを自室のタンスに収納していくのですが、例えばバスタオルなら今たたんだものを右端に入れ、左端にある物を当日のお風呂用として準備します。衣類の形状によって、前後左右の違いはありますが、見事にローテーションされている。同じ衣類を準備しない工夫がされていました。住人さんにとっても一目で分かりやすく、入れ方さえ間違わなければ快適に使っていけます。

よく使ってしまうのですが、「普通はこうする」という言葉を発してしまいます。当時の私もそうだったので、ロール状のたたみ方は私の中ではNGの範疇でした。このままでは明確な説明が出来ない普通派の私と住人さんが衝突するのは必至と感じた当時の主任さんが、分かりやすく説明してくれました。

要約すると、「ロール状にたたむ人はあすなろ学園育ちの人が多く、恐らく四角くたたんでタンスの上下に収納してしまうと、毎回同じ衣類を選んでしまう。一定の環境下において、ミス無く収納、準備を教わってきている人達であり、見た目の問題ではなく、一人で出来ることが自立につながっていく」という主旨の内容でした。地に足を付けて生活をしていく上で大切な事なんだ！と、住人さんの見方を切り替えられた一つの場面でした。

その時からだと思いますが、私の中に「障害を持っているけど一人の人」なのか「一人の人だけど障害者」なのかという問いに、間違いなく前者だと思ってきましたし、今でもそれは変わりません。もっと言えば、あさけ学園の源にはそういう考え方があったと思います。

だからこそ大変な思いをしながらでも、三十年続けてこられたのではないかと思います。もし後者の考え方でいたとしたら、たたみ方にも疑問を感じず、同じ衣類を着ていても「障害者だから仕方ない」と黙認するか、片付けや準備をこちらでしてあげていたと思います。地に足を付けた生活とは程遠くなっていたと思います。

障害はあるけど一人の人として関わるということは、「社会の中で生きるには？」という視点を持ち、住人さんに良い事悪い事を伝えなくてはいけない場面が出てきます。例えば、トイレで人が用を足している横から割り込み用を足してしまう。当然、場所を決めないとか順番を守るといったやり取りになります。それが納得いかず、噛む・叩く・抓る・蹴る・奇声・顔や頭を叩く・爪を剥がすといった他傷や自傷行為を全力でしてきます。

場所を決める、順番を守ることを受け入れられた方が、落ち着いた生活ができるのですが、受け入れられないと、また同じ場面で繰り返されることは明白なので、全力で介入します。

【次ページへ】

二〇二三年度事業計画

自閉症総合援助センター　あさけ学園
施設長　近藤　裕彦

今年の四月、新型コロナウイルス感染症が、感染法上は二類から五類へ変更されました。これに応じた感染予防対策はもちろんのこと、現在の利用者個人の特性や、家族も含めた生活環境を見直し、以下の文中に「継続して」「引き続き」とあるように、熱望してきたコロナ後の生活をひとつずつ模索していく一年になると思います。

1　自閉症総合援助センターとしての取り組み

あさけ学園（生活介護・施設入所支援　定員四十名、短期入所　四名）、ワークセンターひのき（生活介護　定員四十名）、あさけホーム（共同生活援助　二十二名）、三重県自閉症・発達障害支援センターあさけ、あさけ診療所（児童精神科・心療内科）を一体的に運用し、自閉症のある人たちへの総合的な支援を継続していきます。

(1)施設入所支援において、それぞれユニット化した十数名の小集団の居住環境を最大限に活用し、二十四時間を通じた個別的な生活支援プログラムに取り組む。

(2)ワークセンターひのきでは、あさけ学園の日中活動部門と協同した労働・生産活動を軸とし、さらにそれ以外の創作的な活動や社会的な支援を組み込んでいく。

(3)あさけホームでは、日中活動事業所（ワークセンターひのき）と連携し、一般企業で働く人たちへの就労支援を含めた、個別ニーズに対応可能な地域生活支援プログラムを展開していく。

(4)三重県自閉症・発達障害支援センターあさけは、専門的な相談機関として地域の関係機関の後方支援や研修事業を行なうとともに、発達障害者地域支援マネージャーの有効な運用を進める。さらに、短期入所等の施設機能を活用することが有効な人たちについて、自閉症総合援助センターあさけ学園の関係部署と連携して取り組んでいく（ケアシステム会議）。

(5)あさけ診療所では、利用者の精神科医療を担当するとともに、健康や安全面についての管理及び指導を行なう。

(6)利用者の高齢化やその予防、健康の増進に向けて、日中活動部門（職業支援課）と生活の場（施設入所支援、グループホーム、短期入所、家庭、その他）、地域活動・健康増進委員会、医務室、調理部門（栄養士）、外部の専門家等と連携した取り組みを進める。

(7)強度行動障害を示す人たちの支援について、療育的、構造的な環境の必要な利用者への集中的な取り組みや緊急時の短期入所の受け入れ、その後のフォローアップなどの機能を担うための整備を行なう。

(8)新型コロナウイルス感染症に関する感染法上の分類の見直しに伴う社会の変化、利用者の特性や生活環境に応じた感染症予防対策を講じていく。

2　特定相談支援事業所あさけの取り組み

(1)継続して、法人内の福祉サービス利用者に係る計画相談支援（サービス等利用計画の作成・モニタリング）を客観的に行なう。

(2)法人以外の在宅障害者の計画相談支援について取り組む。

(3)地域生活支援拠点事業の相談支援機能を担う検討及び取り組みを行う。

3　二十四時間を通じた生活支援の取り組み

(1)利用者のニーズやその変化に応じた日中活動と夜間の居住支援を相補的に行なうため、常に個々の支援の意味付けや形態などを検討し、有効な支援プログラムや居住環境を工夫する。

(2)自立への意欲や行動の促進をめざすため、生産活動に加えて、個々の利用者に即した日常生活や余暇、社会的活動などを促進していく。

(3)これらを進めるうえで、特定相談支援事業所、サービス管理責任者、支援員、医務室、他の部署、及び家族や後見人、関係諸機関と常に連絡を取り合い、個々の利用者への総合的なサービス提供に向けた協力体制を整えるとともに、ライフイベントや暮らしを支えていく支援、高齢化する利用者の将来を見据えた日中活動や生活の場の整備、地域資源の開発などを進める。

4　地域生活者の現実的なTLCP（Total Life Care Program）への取り組み

(1)利用者の健康面の配慮や高齢化への備え、地域生活の保障、働くことを基本とした自立、社会的自立を促す取り組みなどについて、さまざまな暮らしのニーズの検討・協議を重ね、地域で生活する利用者の住まいの構想を組み立てる。

(2)さんらいずホームA隣接地の今後の整備、法人の業務継続計画（BCP）と連携した運営・支援体制の検討を継続する。

(3)あさけホームは、昨年度末のみえ福祉サービス第三者評価を踏まえて、さらに良好なサービスの提供に向けた取り組みを進めていく。

(4)利用者の社会的自立や地域での安心した暮らしを保障するため、近隣の住民や公共機関と協力・連携し、必要に応じて地域へ出向く支援を行なう。

(5)協同して家庭生活機能の維持・向上をはかるとともに、ライフイベントや暮らしを支えていく支援、高齢化する利用者の将来を見据えた日中活動や生活の場の整備、地域資源の開発などを進める。

5　職員研修、育成について

昨年度に引き続き、これまでの取り組みを職員個人やチームで振り返る作業を通じて、言語化し、共有していくことを目標とします。そして、職員及び各部署の年間目標の達成に向けて、主任職員は、現状の分析、年間研修計画の策定、外部講師による研修の企画・実施します。

また、ウェブによる研修を有効活用しつつ、コロナ後の対面や視察による研修の参加についても検討していきます。

(1)支援員及び世話人は個々に研修計画書を作成し、主任・管理職等と相談しながら目標を達成するための取り組みを進めていく。

(2)主任・リーダーは、研修全体を通じて、進行中のそれぞれの取り組みが前進しているという実感をチームで共有できるよう、コーディネートしていく。

(3)ルーティン化している日々の業務や支援内容について、その目的や意味を見直し、改善をはかる。

(4)社会資源の活用も含め、健康増進、創作活動等のプログラムの開発、及びそれらを計画・実施できる支援者の養成を進める。

(5)定期的にケースカンファレンスを実施する。

(6)外部講師によるスーパービジョンで明確になった課題へ丁寧に取り組み、その成果を蓄積し、深めていく。

(7)権利擁護に関する職員研修の開催、及び外部研修会へ積極的に参加し、利用者の人権を守る意識を高めていく。

6　施設整備に向けた取り組み、検討、その他

(1)あさけ学園外溝整備（合併浄化槽跡、北側駐車場階段通路設置）に向けた取り組み

(2)あさけ学園A棟トイレ改修工事に向けた取り組み

(3)感染症、防災、防犯に関する設備・物品等の整備及び充実

(4)感染症及び食中毒の発生予防及びまん延防止のための対策を検討する委員会の設置

(5)業務継続計画（BCP）の策定

(6)建物等整備計画の原案作成に向けた検討

【前ページより】

黙認すれば支援員は無傷ですが、それではちょっとした外出先の公衆トイレでもやってしまうので必死に食い下がります。

住人さんに何かを伝えていくに当たっては、その人の特性や性格にも配慮し、どういう伝え方が良いのか。というフォローをしていかないといけないのか。支援員はチームとして同じ方向を向いていないと、伝わる物も伝わりません。支援員と言っても、年齢も経験値も価値観も違うので、意見を擦り合わせることは大切な作業になってきます。

野球に例えると、九回裏1アウト1塁1点差ビハインドの状況で、ベテランでも新人でも最低限2塁への進塁打を考え、次の打者に繋げていくことが求められます。逆転ホームランを狙って打ち、そうなれば良いのですが、ダブルプレーにでもなればゲームセットです。地道で目立たない、丁寧な関りが求められます。

冒頭で述べた「三十年続けられた理由」は、あさけ学園という所が、「障害を持っているけど一人の人」という考えが源にあり、それに向けてチーム一丸となって知恵を出し合っていく姿勢があったからだと思います。時代や制度、体制等が変わっても、そこはぶれてはいけない所だと思っています。

令和五年度　後援会費納入のお願い

社会福祉法人檜の里後援会
会長　飯田　俊司

社会福祉法人檜の里後援会活動につきましては、日頃より多大のご支援を賜り厚くお礼申し上げます。

私たちは自閉症という障害を持つ人達が、彼らなりに社会の一員として自主自立を目指し、豊かな人生を生き抜くよう共に道を拓いて行くことを目的としています。

この趣旨に賛同して会員となってくださいました皆様方には、今年度も引き続き格別のご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

同封の郵便振込用紙に必要事項をご記入の上ご送金頂きたく存じます。

なお、再度のお願いになりますので、既にお振込の節は、悪しからずご容赦下さいますよう重ねてお願い申し上げます。

年会費
正会員　一口二万円以上
賛助会員　一口二千円
（何口でも結構です）

お問合せは「あさけ学園」
℡059―394―1595です。

全国自閉症支援者協会
令和五年度総会の開催

令和五年七月十二日㈬、委任状を含む六十二施設が出席して全国自閉症支援者協会総会が開催されました。今回、三年ぶりにＡＰ東京八重洲の会場へ参集し、対面で行なわれました。

プログラムとしては、松上利男会長の挨拶、参議院議員の山本博司氏による講演「発達障害者支援の今後の課題と展望」、総会の議事、情報交換会と続きました。

はじめの講演に際して、山本氏から、前厚生労働副大臣、発達障害の支援を考える議員連盟事務局長、自閉症のある重度知的障害者をもつ父親との自己紹介がありました。短い時間の中、発達障害者の支援に関する厚生労働省及び文部科学省の予算や施策、さらに、発達障害に関する東アジア・ＡＳＥＡＮ経済研究センター（ＥＲＩＡ）プロジェクト活動についてお話しいただきました。

総会では、令和四年度事業・決算報告と令和五年度事業計画・予算案、発達障害支援スーパーバイザー養成研修、第三十五回研究大会（大分ＷＥＢ大会）報告、第三十六回研究大会（神奈川大会）企画、役員の一部変更、在り方検討会（協会理念等の再構築について）報告、強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会報告、その他が審議され、すべての案件が全会一致で承認されました。

なお、今年度の第三十六回研究大会について、十二月十一日㈪、神奈川ブロックが担当し、対面方式を主体に、日帰りにも便利な新横浜駅前の新横浜ラポールで開催されることが決まりました。主管施設の社会福祉法人横浜やまびこの里小林信篤氏から、現在のところ、高齢化、地域移行、行動障害などを視野に入れたテーマを検討中で、当日に行政報告、基調講演などを対面で、後日、実践報告などをオンライン配信するという企画が提案されました。

その後、休憩をはさんで情報交換会に移りました。今回は、広報委員会、権利擁護委員会、政策委員会の三つの委員会、発達障害者支援センター部会、児童療育部会の二つの部会、そして、全自者協の七つのブロック（北海道・東北、関東、神奈川、北信越、東海、近畿、中国・四国・九州）から活動・計画の報告が行なわれました。

私たち東海ブロックでは、令和四年度からオンラインによるブロック会議を開催し、各施設の現況把握や研修会の企画・実施を行ないました。十二月のブロック研修会には、オンラインで二十二名が参加し、他職種によるグループ討議も含めて、高い評価をいただきました。

（施設長　近藤裕彦）

ご寄付ありがとうございました

【運営資金】
▽石崎春子様

【物品】
▽あさけ学園保護者会＝経口補水液・スポーツ飲料

支援と連帯の輪・和 ㊾

利用者の健康問題 ㊽

あさけ診療所所長　小西眞行

この夏は日本列島も熱帯になったかのような酷暑でした。

学園の利用者は酷暑疲れや、コロナ禍のストレスが続く中で、先月九月十七日に居住棟のＤ棟でコロナ陽性者が出ました。

感染力の強いコロナはたまちちＤ棟全体に広がりその後Ｃ棟にも拡大し、クラスター感染となってしまいました。

幸い重症者は出ませんでしたが、コロナに罹患した利用者のみならず対応する支援員や職員、看護師達も大変な苦労でした。何とか先ずＤ棟で、次いでＣ棟も十月一日にはコロナ療養は解徐となりました。

実は女子棟のＢ棟は、去年の十二月に全員が感染して、収束までに二週間以上かかった経緯がありました。

それと、今から心配なのはインフルエンザです。インフルエンザといえば寒い冬のものでしたが、今年はもうこの夏から流行が始まっています。学園の予防接種は例年通り十二月七日に予定されていますが、今から油断できません。

利用者の平均年齢も五十五歳を超え、六十歳以上の高齢者も増えました。幸い利用者にガン患者はいませんが、心筋梗塞や脳梗塞の予防など健康管理に細心の注意が必要になっています。そして、認知症への理解も深める必要があります。自閉症や知的障害の利用者にはどの様な変化が見られれば認知症といえるのか、学園の大きな課題です。

ところで話は変わるのですが、前号の紙面にあったように、私の退職のためこのコラムも今回が最後となりました。つたない文章をお読みくださった皆様ともお別れすることになりました。四十八回も執筆の機会を与えて下さったあさけ学園や機関誌担当の皆様にも感謝の気持ちで一杯です。

最後に私の勤務歴ですが、あすなろ学園の三十年は児童・青年の自閉症を中心とした診療で、十亀史郎先生の下での勤務でした。あさけ診療所に転じてからは成人の自閉症について経験を積むことになり、二十三年が経ちました。前の奥野園長、今の近藤園長、多くの支援員の皆様からは沢山の事を学ばせて頂きました。

外来の診療で一般就労や障害者就労をした発達障害の若者に、私は指を二本立てて、就労がうまくいく条件について話します。一つは与えられた仕事が出来る事、だから給料がもらえるのですよ。もう一つは、職場の人間関係が良いことです。この二つがいいとこれからも仕事は続きますよと説明します。

私の場合は、仕事の方はなんとか八十歳になるまで取り組めてきたこと、職場ではスタッフの皆さんに助けられてここまで来られたこと。本当に皆様有難うございました。

利用者の面会について

あさけ学園では、新型コロナウイルス感染症予防対策として家庭帰省、外出は中止となっていますが、居住棟（Ｂ・Ｃ・Ｄ棟）、共同生活住居（あさけホーム）では、日時を指定して、利用者と保護者の対面面会を行っています。

新型コロナウイルス感染症が第五類に移行になりました。だからといって感染症自体が弱くなったわけではありません。

そういう状況の中、外泊や旅行などは控えてきています。保護者と会う機会も依然制限がされています。月に二日面会可能な日を設定しています。面会時間は十五分です。またその中での飲食は控えてもらっています。十五分と限られた時間ではありますが、利用者にとっても保護者にとっても嬉しく、また貴重な時間になっています。

お互い顔を見て、無事な姿を見てほっとしているのだと思います。利用者の多くは、言葉に出して気持ちを伝えることが難しい人たちですが、普段と違う表情を見せてくれたりして気持ちを感じ取ることができます。「会えて良かった」と口に出す利用者もいました。その言葉の通りなのだと思いました。

面会したくても簡単にはできない保護者の人たちもいると思います。オンラインであったり、電話であったり何かしらの手段を私たちも考え、繋いでいきたいと思います。

（あさけホーム管理者　清水孝幸）

永年勤続表彰

○社会福祉施設功労者として菰野町社会福祉協議会から表彰されました。（敬称略）

【令和五年度】
石崎眞由美

○社会福祉法人檜の里に永年にわたり勤続したとして表彰されました。（敬称略）

【令和五年度】
《三十五年勤続》
松本知子
《三十年勤続》
中村和博
三宅光子
《十五年勤続》
野呂さつき
《十年勤続》
清水美姫
山下奈央

永きにわたりあさけ学園に尽力された功績を称えるとともに、感謝申し上げます。

【編集部】

メンバー紹介 ㊿

支援員
秦（はだ）　彩見（さいみ）

四月からＢ棟支援員として働く事になりました。元気に明るく頑張ります。よろしくお願いします。

世話人
伊藤（いとう）　江美（えみ）

四月に入社し、少しは仕事に慣れてきたと感じます。利用者さんとの関わりを大切にしていくことを、心がけて勤めていきたいと思います。

支援員
森（もり）　瞳（ひとみ）

新しくパン工房に入りました。よろしくお願いします。

洗濯場担当
内田（うちだ）　百合子（ゆりこ）

七月から洗濯場に入りました。よろしくお願いします。

学園だより

木工・食品加工　パン工房

○木工

私たち木工班は、杉板や、地域の山林からいただいた原木や、間伐材を加工し、バーナーで焼いたものをブラシ掛けし、仕上げた焼杉を販売しております。主な製品としましては、鍋敷き、コースター、箸置き、どこでも花壇（花壇柵）を作成しております。

利用者の仕事は、杉板に型を書き、糸鋸で成型し、バーナーで焼き目を付け、電動ブラシですすを落として完成させる工程を担っています。それ以外でも、電動ルーターを使用し、コースターや、花壇柵の面取りも行っています。

また、コースターの、溝堀も利用者が行っています。どれも、機械を使用する危険を伴う仕事ですが、職員と一緒に、慎重に行いながら楽しんで行っています。

（支援員　北山俊介）

○食品加工

食品加工は大きく分けると夏と冬が稼働時期になります。

夏は梅干しを作ります。三十年近く生息する梅の木の実を中心に地域から無償の梅を収穫して使用します。

多い時で約一〇〇kgの漬け込みをします。年々梅の収穫率が落ち、作る量も少なくなっている現状ではありますが、声をかけて頂ければ可能な限り手掛けたいという思いはあります。梅干しが出来るとそのまま販売もしますがさらに手をかけて練り梅、しそふりかけも手掛けます。

冬はみそ作り。あさけの畑で収穫した大豆を中心に三日間かけて作ります。

二日間かけて米麹を作り三日目に米麹と大豆を合わせて味噌を仕込みます。半年以上経過すれば食する事は出来ますが時間を置けばおいただけ味に深みを増していきます。機会があればぜひご賞味下さい

（支援員　森嶋久美）

○パン工房【ポラン・輝】

パン工房は、ベテラン利用者さん二名と七月より新人職員が加わり五名となりました。月火水曜は主に道の駅の商品まこも入焼かりんとう、まこも葉ラスク、まこも入スコーンを作り、木曜はレストランエスカルゴのパン、金曜日はあさけの給食のパンを焼いています。

コロナ時期は注文が無くなり利用者さんも不安そうでしたが、今は以前のように注文が入るようになって来ました。

各自が得意なところを活かし、材料の計量等の準備、成形、袋づめ、検品、片づけまで、仕込みと焼成以外の工程をほぼ任されています。

新しい仕事としては、納品前に袋のラベルチェックがあり、衛生管理という意識づけができたらと思います。これからも美味しい商品を提供できるように、皆で頑張っていきます。

（支援員　廣井　晶）

こんにちは

コーナーは、インタビュー形式ですが、今回は四日市市大矢知地区民生委員・児童委員の皆さんに投稿いただきました。【編集部】

七月五日、大矢知地区民生委員・児童委員協議会、令和五年度障害児（者）福祉研究事業部の七名のメンバーが「自閉症総合援助センター あさけ学園」を訪問しました。予定より早い朝九時半に到着。近藤裕彦施設長より施設概要の説明を受け、質疑応答の後、あさけ学園、あさけホーム、ワークセンターひのき、木工作業棟をご案内いただきました。

その後の意見交換では、職員の皆さんの利用者に寄り添う細やかな気遣いや生活介護の具体的な内容など幅広い領域に話題が及び、正午近くまで活発に意見交換させていただき、大変有意義でした。

今回の訪問により、ほとんど馴染みのなかった自閉症者について一定の理解を得ることができました。今回の経験を今後の民生・児童委員の活動に活かしていきたいと思っています。ご多忙の中、長時間ご対応いただいた近藤様、訪問時に快く受け入れていただいた職員の皆様、そして利用者の皆様、どうもありがとうございました。

防災訓練

八月二十四日㈭、地震災害を想定した防災訓練を実施しました。午前は地震発生時の避難訓練を通し、揺れがおさまるまでの安全確保、その後の避難経路や実際の動きを確認しました。

危険回避や状況判断が困難な利用者さんに対して、支援員が声を掛け合い避難誘導し、必要に応じて応援に駆けつけるなどの動きを意識して行ないました。

また、災害時用のガス庫を活用した炊き出し訓練も行い、百食以上の非常食を支援員が協力して準備し、昼食に美味しく頂くことが出来ました。

午後は、ＡＥＤ訓練を新人職員中心に行ないました。訓練用の人体模型を用いて胸骨圧迫、ＡＥＤの使用手順を実践形式で学びました。あさけ診療所の看護師指導のもと個々への丁寧なレクチャーをして頂きました。

一方、非常時用発電設備の活用方法について、停電時に使用できる場所（コンセントや照明）の確認や、モバイルＷｉ Ｆｉを活用した情報確保など、主任職員を中心に学び理解を深めることができました。

当日はあいにくの雨天となり予定を変更しながらの訓練となりましたが、災害はいつ起こるのかも分りません。緊急時こそ出来るだけ冷静な対応が求められます。被害を最小限に抑えるとともに、大切な命を守るための防災に今後も努めていきたいと思います。

（支援員　森谷賀樹）

ようこそ「あさけ」へ ～実習を終えて～

高田短期大学

武久奈央子

初めての施設実習で、不安や緊張がありましたが、利用者さんが優しく接してくれました。自閉症の意味は、授業で学んでいましたが、現場は見たことがなく、落ち着かない・大声を出す印象でした。

しかし、創作活動や夕飯の準備で会話が弾み、一人ひとりの性格や特徴を掴んできました。名前も覚えてもらえて嬉しかったです。

この九日間で利用者さんと距離が近づき、様々な会話ができて、自閉症に対する学びが深まりました。

山田ゆい

始めは、どのように利用者さんとコミュニケーションをとるのかわからず、戸惑いがありました。

一緒に夕食の準備や創作活動をする中で、少しずつ一人ひとりに寄り添った声かけが、できるようになっていきました。「山田さん！こんにちは！」と名前を呼んで挨拶してもらったり、楽しそうに活動していたりする姿が、見られて嬉しかったです。

実際に一緒にするときは、自分自身がまずは楽しみ、利用者さんにあった援助は何かを常に考えて行動することが大切だと学びました。

須崎愛唯

実習が始まる前は、自閉症や知的障害についてあまり分からず、利用者さんとコミュニケーションを取ることができるか、支援ができるか等、様々な不安がありました。ですが、支援員の方々の利用者さんへの関わり方を見たり、教えていただいたことを活かしながら接していくと、利用者さんの言葉の意味を少しずつ理解し、コミュニケーションをとることができました。

利用者さん一人ひとりに合った適切な方法で援助をすることが大切だと学びました。

本当にありがとうございました。

潮谷奈々帆

初めは、利用者さんにどのように声を掛けたらいいのか分からず不安でしたが、職員の方々に、利用者一人ひとりに合った関わり方を丁寧に教えていただきました。

利用者さんとコミュニケーションを取るときは、目を合わせて簡潔に分かりやすく伝えることが大切だと学びました。日を重ねるごとに、少しずつ利用者さんの言葉も聞き取れるようになってきて、名前を呼んでくれたときはとても嬉しかったです。

九日間、本当にありがとうございました。

あさけ学園のお客様

令和五年一月一日から
令和五年九月三十日まで
（敬称略）

▽権部良子、亀澤朋恵、武久奈央子、山田ゆい、須崎愛唯、潮谷奈々帆
（高田短期大学）

▽三本木和代、林正実、岩根賢二、野島香織、太田克彦、田村重数、人見悦子
（大矢知地区民生委員・児童委員協議会障害児（者）福祉研究事業部）

▽服巻ひとみ（保護者）

編集後記

良くない出来事というのは予期せぬタイミングで訪れるもの。いつだってそうだ。それも厄介なことに連鎖的に次々と続く。「おしまいにしてください！」と強く訴えたところでこちらの願いなんてお構いなし。

「ちょっと待ってよー」なんてのも勿論通用しないらしい。予想もしなかった事が想定以上のスピードで雪だるま式に膨れ上がっていく様はお見事。圧巻。こうなると最早過ぎ去るのを待つ他にない。気が付けば家族の心配をよそに完全に支配されてしまっている。

いつまで続くのか。何とか逃れる術は無いものか。万策尽きた挙句、いつもと違う日常に浮かんだ笑みに聞いてみる。「おしまいにしていただけませんか？」今日も答えを待って。

（支援員　池田健一郎）